

蓮台寺カキの果実型について

服部 吉男

Types of Fruit Shape of the Japanese Persimmon 'RENDAIJI'

Yoshio HATTORI

1. 緒 言

蓮台寺カキは伊勢市を中心に栽培されており、その栽培面積は約50haで約100戸の農家が栽培している。

蓮台寺カキの来歴については明確ではないが、伝説によると約1,200年前空海(弘法大師)が諸国をめぐり、伊勢を訪れたとき、秋の陽ざしを浴びて青空に赤く熟したカキの実を見て所望された。このカキをたいへんお気に召されてこの地方で広くつくるよう奨められたという。

史実では、江戸時代初期綱吉の頃伊勢市勢田町の南部に神宮祭主大中臣永頼が建立したと伝えられる鼓嶽山蓮台寺(明治2年廃寺)があったため、この地域が蓮台寺と呼ばれるようになり、この地域に育つかキも蓮台寺カキと呼ばれるようになったようである。

ところで、蓮台寺カキは、9月中旬から11月上旬にかけて収穫、脱渋して出荷されるが、初期収穫時の9月中旬には果皮の緑色が抜け黄色味がついただけの果実が出荷される。また、果実型の変異が多いといわれているが、調査した事例は少ない。そこで、蓮台寺カキの優良系統の選抜を目的として1984年(昭和59年)から調査を開始したのでその成果をとりまとめ報告する。

なお、本研究を実施するにあたり、伊勢市勢田町の蓮台寺カキ栽培農家上田捨吉氏、旧伊勢市南部農協岩崎稔氏には多大のご協力をいただき、ここに心からお礼を申し上げます。

2. 材料及び方法

1) 聞き取り調査

1984年5月29日、伊勢市勢田町の上田捨吉氏の自宅へ伺い、聞き取り調査を実施した。

2) 樹別調査

1984年から、上田氏園で各果型の特徴がよくでると思われる樹(以下、各果型の樹という)を2本ずつを選び、

樹別に追跡調査を開始した。各果型の樹の樹齢は小判型の樹以外は50年生以上と思われ、小判型は10年生程度であった。

調査は開花期間中と収穫期間中に実施した。花の形質については花弁数、へた片数、10花重を調査した。果実の形質については1樹当たり40~100果について、各果型の出現頻度を調べ、また斜線溝、側溝、2重柿性などについて種苗特性分類調査の基準に従って1樹当たり5~10果について調査した。

1985年と1986年には花の形質(花弁数、へた片数)と収穫期の果実の形質(斜線溝、側溝の程度など)との相関を検討した。

3) 官能検査

どの果型が消費者に支持される果型であるかを検討するため、1986年10月11日伊勢市で開催された三重県農林水産まつりの会場と同年10月23日三重県農業技術センターで官能検査を実施した。官能検査は順位法でおこない、表5に示す内容で“かたち”“色”“味”“総合”の4項目に対し、よいと思われるものから順位をつけてもらった。伊勢市での回答数は81、回答者の性別は男性31名、女性47名、不明3名、平均年齢は44.7才、農技センターでの回答数は60、性別は男性46名、女性12名、不明2名、平均年齢は35.9才であった。

3. 結 果

1) 聞き取り調査

上田氏の話によると、蓮台寺カキは在来系と大平系の2つに大きく分けられるという。在来系は果実が小さく、腰高で種子が多く、果頂部は平らで、2重柿性は少ない。大平系は在来系より果実大きく、果形はより扁平で、種子が少なく、2重柿が多い。大平系はさらに3つに分けられ、その形からやや長形の小判型、円く側溝の多い菊

型、果頂部に大きくなくぼみのできる（2重柿性のある）ヘソ型に分けられる。なお、大平系は昭和5年（1930年）に指導園が精農家達によって勢田町内に開設されたとき、山田吉雄氏（当時神宮御園の栽培技師、その後三重県の初代専門技術員）によって、志摩地方から移入されたのではないかとと思われるとのことであった。

2) 樹別調査

(1) 花の形質

ヘタ片数は平均で4.0に近い数字であったが、4枚が一般的ではなく、5枚のものが比較的多くみられた。花弁数も前川次郎では4枚が標準的であるが、蓮台寺の各果型の樹では平均で5枚以上であった。樹別には、在来系の樹が最も少なく、大平系小判型、菊型、ヘソ型の樹の順に多くなる傾向であった。ヘソ型の樹では平均で6枚以上であった。また、10花当たりの重さは、在来系、小判型、菊型、ヘソ型の樹の順に重くなり、ヘソ型の樹の花が大きい傾向であった（表1）。

(2) 各果型の出現頻度

各果型の樹における各果型の出現頻度は、在来系の樹では在来系の果型が最も多く出現し、大平系小判型、菊型の果型の順に少なくなった。ヘソ型の果型の発生もわずかではあるが認められた（表2）。

大平系小判型の樹では、年次変動があるが、小判型の果型の出現頻度が高く、在来系の果型も同程度出現し、菊型の果型の発生も若干見られた。

大平系菊型の樹では、菊型の果型の発生が多く、小判型や在来系の果型も見られた。また、ヘソ型と思われる果型も1～2%程度出現した。

大平系ヘソ型の樹では、菊型と思われる果型が最も多く、ヘソ型の果型は20～30%程度出現し、在来系の果型の発生がこれに次ぎ、小判型の果型はやや少なかった。

(3) 果実の形質

1果重は大平系ヘソ型の樹で最も大きく、菊型、小判型の樹の順で小さくなり、在来系の樹が最も小さかった。果径についても同様の傾向であった（表3）。

果径／縦径で示した果形指数では、大平系菊型とヘソ

表1 花の形質

樹No.	ヘタ片数				花弁数				10花重		
	'84	'85	'86	'87	'84	'85	'86	'87	'84	'85	'86
在来系 1	4.0枚	4.0枚	4.0枚	4.0枚	5.4枚	5.0枚	5.0枚	5.4枚	11.1g	10.4g	11.3g
2	4.0	4.1	4.1	4.0	5.6	4.4	4.7	5.0	12.0	11.2	11.4
大平系小判型 1	4.2	4.0	4.0	4.0	5.8	4.9	5.5	5.9	10.7	10.1	12.9
2	4.0	4.0	4.0	4.0	6.0	5.0	5.8	5.8	12.0	10.4	11.4
菊型 1	4.1	4.1	4.2	4.1	6.2	5.5	5.8	5.9	12.7	12.7	13.2
2	4.0	4.0	4.2	4.0	6.2	6.1	5.6	6.1	12.0	11.0	12.8
ヘソ型 1	4.1	4.0	4.1	4.0	6.4	5.6	6.3	6.1	13.0	10.2	14.1
2	4.0	-	4.1	4.0	5.8	-	6.9	6.1	14.0	-	13.7
前川次郎	3.9	-	-	-	4.0	-	-	-	16.0	-	-

(注：調査花数は10～40花、前川次郎は農業技術センターほ場のもの)

表2 1樹内における各果型の出現頻度

果型 樹No.	在来系			大平系小判型			大平系菊型			大平系ヘソ型		
	'84	'85	'86	'84	'85	'86	'84	'85	'86	'84	'85	'86
在来系 1	76.2%	81.9%	61.3%	20.5%	12.8%	25.5%	3.3%	5.3%	12.3%	0%	0%	0.9%
2	63.5	73.3	74.5	23.5	22.8	20.0	13.0	4.0	5.5	0	0	0
大平系小判型 1	2.7	43.3	56.6	81.8	44.4	36.8	15.5	12.2	6.6	0	0	0
2	7.6	52.6	38.7	87.6	40.0	56.6	4.8	7.4	4.7	0	0	0
菊型 1	8.0	8.8	11.1	46.0	33.8	28.7	44.0	57.5	59.3	2.0	0	0.9
2	8.0	34.3	20.6	50.9	14.7	32.0	41.1	48.0	46.4	0	1.0	1.0
ヘソ型 1	3.8	21.1	17.6	2.9	2.1	3.4	67.6	46.3	51.3	25.8	30.5	27.7
2	22.6	36.7	16.5	26.1	7.3	11.0	30.4	23.9	31.2	20.9	22.0	41.3

(注：調査果数 '84は1樹当たり100果、'85は1樹当たり40果、'86は1樹当たり100果)

表3 各果型の樹の果実形質

果実形質	年次	在来系1	在来系2	小判型1	小判型2	菊型1	菊型2	ヘソ型1	ヘソ型2
1果重(g)	'84	171	168	181	196	224	198	279	251
	'85	172	166	172	198	200	182	250	230
	'86	169	170	178	204	208	214	211	222
果径(mm)	'84	73.2	72.9	74.7	76.7	82.3	78.0	87.2	85.5
	'85	72.9	73.5	73.2	74.8	79.3	76.3	87.6	86.9
	'86	72.9	73.9	75.4	76.9	80.2	80.5	82.1	84.2
縦径(mm)	'84	52.5	51.4	53.3	56.5	55.6	54.8	54.5	56.7
	'85	52.4	51.4	51.8	52.0	52.8	50.7	54.5	52.4
	'86	52.3	51.4	52.0	56.0	52.3	55.6	51.5	50.9
果径/縦径	'84	1.40	1.42	1.40	1.36	1.48	1.43	1.60	1.51
	'85	1.39	1.43	1.41	1.44	1.50	1.50	1.61	1.66
	'86	1.40	1.44	1.45	1.37	1.54	1.45	1.60	1.67
果色	'84	2.7	2.9	3.1	3.3	2.8	3.0	3.6	2.9
	'85	3.2	3.0	3.5	3.6	2.7	2.8	3.2	3.2
	'86	3.3	3.4	3.3	3.9	3.7	3.4	3.5	3.4
頂端	'84	6.0	6.0	5.2	5.6	7.0	6.0	7.8	7.6
	'85	6.0	6.0	5.8	6.4	7.0	6.2	8.0	8.0
	'86	6.5	6.2	6.0	5.9	7.6	7.2	8.0	7.8
斜線溝	'84	6.0	6.4	7.8	7.6	8.0	7.8	6.2	6.4
	'85	5.2	4.2	3.8	5.2	6.0	6.0	5.0	4.6
	'86	7.0	6.9	7.1	6.2	6.8	7.0	6.6	6.2
側溝	'84	4.6	5.4	5.8	3.8	5.8	5.8	6.6	7.0
	'85	2.6	2.2	4.6	3.0	3.4	3.8	7.0	7.0
	'86	6.6	5.4	6.6	4.4	6.2	4.8	6.8	7.0
条紋	'84	0.2	0.2	0	0.2	0.6	0.4	0.6	0.2
	'85	0	0	0.2	0	0.4	0	1.0	0.8
	'86	0	0	0	0	0.6	0	0.2	0.4
亀甲紋	'85	5.4	5.8	5.8	6.2	4.6	4.6	4.6	4.2
	'86	4.4	4.0	4.2	4.0	3.6	4.0	4.2	3.6
座の有無	'84	0.2	0.2	0	0	0.2	0.4	0	0
	'85	0.2	0	0.6	0	0	0.2	0	0
	'86	0.2	0.2	0	0	0	0	0.1	0
2重柿性	'84	0	0.4	0.2	0	0.8	0.2	1.8	1.8
	'85	0	0.6	0	0	0.4	0.6	1.8	1.8
	'86	0.3	0.8	0.2	0	1.0	0.2	1.6	1.7
子室数	'84	10.2	11.2	11.0	11.6	13.8	12.2	15.4	14.0
	'85	10.2	10.6	9.8	11.2	11.2	11.4	17.4	19.0
	'86	10.2	10.6	10.9	10.7	12.8	12.7	12.4	12.0
種子数	'84	2.0	6.4	1.4	2.6	4.0	4.4	3.0	2.6
	'85	3.0	5.6	0	0	2.0	0.6	0.6	2.8
	'86	1.1	5.6	0.3	0.4	0.9	1.8	1.5	4.7
褐斑の広さ	'85	47	82	0	0	24	5	6	32
	'86	15	82	3	4	6	21	21	53
糖度(Bx)	'84	9.7	10.0	9.3	9.9	9.4	9.5	10.1	9.3
	'85	9.4	9.6	9.5	10.0	9.4	9.1	9.6	9.6
	'86	14.9	14.8	14.2	16.2	15.5	14.3	14.0	14.3

注：果径；(長径+短径) / 2
 縦径；果実の高さ
 果色；カラーチャート
 頂端；凸1～凹8
 斜線溝；無し1～有り深い8
 側溝；無し1～有り深い7
 条紋；無し0～有り1

亀甲紋；無し1～有り多い7

座の有無；無し0～有り1

2重柿性；無し0，果実を切って判るもの1，外観上判るもの2

褐斑の広さ；果実横断面の褐斑面積の割合(%)

糖度(Bx)；'84と'85はタンニンを沈殿させて測定した，'86はアルコール脱渋後の測定値。

型の樹で数値が大きく、大平系小判型、在来系の樹が小さかった。つまり、大平系小判型と在来系の樹は腰高であった。

果色は在来系の樹でカラーチャートによる数値がやや低い傾向を示した。

頂端は在来系の樹はほぼ平らで、大平系小判型の樹でやや凸であり、大平系菊型とヘソ型の樹では凹であった。

斜線溝は、大平系菊型の樹で多く、小判型の樹がこれに次ぎ、ヘソ型、在来系の樹で少なかった。

側溝は、大平系ヘソ型の樹で多く、菊型、小判型の樹がこれに次ぎ、在来系の樹は少なかった。

条紋は、ヘソ型の樹で発生が多く、菊型の樹がこれに次ぎ、小判型、在来系の樹では少なかった。

亀甲紋は、在来系と小判型の樹でやや多い傾向であった。

座の出現程度は低かったが、各果型の樹で少しみられた。

2重柿性は、ヘソ型の樹では外観上判断できるものが多く、菊型の樹では果実を切って識別できるものが多かった。小判型や在来系の樹でも切ってみれば2重柿であるものがみられた。

子室数は年次変動もあるが、10以上が普通で、在来系小判型、菊型、ヘソ型の樹の順に多かった。またヘソ型の樹では、2重柿部分に子室がみられた。

種子数は在来系の樹で多く、ヘソ型、菊型、小判型の樹の順に少なくなった。なお、現地では人工受粉は実施していない。また、受粉樹の混植はなく、近隣の雄花を着生する樹からの花粉によって種子が入ったものと考えられる。

褐斑の広さは、種子数と同様の傾向を示し、在来系、ヘソ型、菊型、小判型の樹の順に小さくなった。種子数が子室数の半分程度で、80%以上の果肉に褐斑がはいった。

糖度は年次変動はあったが、各果型の樹間に明らかな

差が認められなかった。

(4) 花の形質と果実の形質の相関関係

1985年には花弁数と斜線溝の程度と本数に正の相関がみられたが、1986年には花弁数と側溝に正の相関がみられ、また頂端にも正の相関がみられた。ヘタ片数と果実の形質では、1985年のヘタ片数と側溝本数に正の相関がみられただけであった(表4)。

3) 官能検査

伊勢では“かたち”、“色”の評価はばらばらであったが、“味”の面では小判型の評価が低かった。“総合”では特にこの果型がよいという傾向はなかった(表6)。

農技センターでは、“かたち”、“色”で小判型の評価が高かったが、“味”ではヘソ型の糖度が高かったにもかかわらず評価に差がみられなかった。“総合”では、“かたち”、“色”で評価の高かった小判型が高く評価され、果型の乱れているヘソ型、菊型の評価は低かった。

伊勢は蓮台寺の産地であり、消費も多いことから調査実施中にも「蓮台寺柿はすじの多いのが特徴だ」という声が多く聞かれ、果型の乱れは抵抗なく受け入れられているものと思われた。

農技センターでは、蓮台寺カキという名前すら知らない人が多く、果型の乱れに対し敏感であり、形のすっきりした小判型に人気が集まったものと思われる。

4. 論 議

蓮台寺カキは1958年(昭和33年)12月22日伊勢市の天然記念物に指定されているが、その来歴については不明な点が多い。

菊池によれば、17世紀の中頃から文献にカキの品種名があがってきたとされているが、蓮台寺は江戸時代の文献に取り上げられていない。

蓮台寺が文献上初めて姿を現すのは、明治45年(1912年)の農商務省農事試験場による「柿の品種に関する調査」である。この中で蓮台寺は甘柿の部、御所型以外の

表4 花の形質と果実の形質との相関係数

年次	果実の形質						
	斜線溝 程度	線 本数	側溝 程度	溝 本数	頂端		
花の形質	ヘタ数	'85	0.11	0.05	0.01	0.30**	—
		'86	0.02	0.13	0.20	0.05	0.18
	花弁数	'85	0.30**	0.57**	0.19	-0.02	—
		'86	0.21	0.23	0.48**	0.57**	0.42**

注) '85, '86ともにn=72

表5 官能検査調査表

蓮台寺カキアンケート

年齢 _____ 性別 男・女

前にある4つの試料（蓮台寺カキ）を見て（食べて）比較し、次の問いにお答えください。問1～問4について、もっとも……なものを1位として、1から4までの順位をつけてください。よく似ていると感じても必ず1, 2, 3, 4の順位を数字で記号の下に書いてください。

問1 かたち かたちが最も良いと思われるものを1位、以下2位、3位、4位とつけてください。

A	B	C	D
_____	_____	_____	_____
位	位	位	位

問2 色 色が最もよいと思われるものを1位、以下2位、3位、4位とつけてください。

A	B	C	D
_____	_____	_____	_____
位	位	位	位

問3 味 食べてみて最もおいしいものを1位、以下2位、3位、4位とつけてください。

A	B	C	D
_____	_____	_____	_____
位	位	位	位

問4 総合評価 見た感じと食べた感じから最もよいと思われるものを1位、以下2位、3位、4位とつけてください。

A	B	C	D
_____	_____	_____	_____
位	位	位	位

表6 伊勢での評価順位

果 型	果実の形	果実の色	味	総合	
在 来 系	2.1	2.0	2.2	2.2	
大 平 系	小判型	2.2	2.8	3.3	3.0
	菊 型	2.8	2.7	2.4	2.5
	ヘソ型	2.8	2.6	2.1	2.3
一致性 (W)	0.001	0.07**	0.20**	0.08**	

表7 嬉野町（農技センター）での評価順位

果 型	果実の形	果実の色	味	総合	
在 来 系	2.2	2.3	2.4	2.3	
大 平 系	小判型	1.6	1.8	2.0	1.7
	菊 型	2.5	3.9	2.9	2.8
	ヘソ型	3.7	2.8	2.6	3.2
一致性 (W)	0.28**	0.20**	0.09**	0.26**	

部、偏型の部、蓮台寺型の標準品種として登場する。なお、この型には三重産の平柿も登場する。蓮台寺は、有望と認むべき品種として取り上げられた甘柿の部の29品種の1つとして取り上げられている。この当時の甘柿の分類はPC甘とPV甘が甘柿とされPC渋とPV渋は渋柿とされていたようである。

この文献の図版には子室数8、種子数5、頂端が平らで、斜線溝が4本程度、側溝があまり発達していない果実があり、果肉の横断面全面に褐斑がはいっている。現

在の蓮台寺は在来系でも子室数は10以上が普通であり、この当時の蓮台寺はどのような経緯で農事試験場に送られたかを当時の三重県農事試験場の業務報告などで調べてみたがはっきりしたことは判らなかつた。

一方、三重県農事試験場の大正2年度（1914年）の業務報告には三重県内の柿品種分布調査が行われている。この中では渋柿の部の平柿の部に蓮台寺（南牟婁）、甘柿の部、平柿型＝蓮台寺として平柿（北牟婁）、平柿（多気）、平柿（宇治山田）、平柿（志摩）、大平（志摩）、

表8 蓮台寺4つの果型の比較

果 型		果実の大きさ	果 型	側 溝	斜 線 溝	2 重 柿 性
在 来 系		小	やや腰高	少	少	微
大 平 系	小判型	中	やや腰高	中	中	微
	菊型	大	扁平	中	多	有
	ヘソ型	大	扁平	多	中	有

平柿（飯南）、水平（鈴鹿）、尾鷲柿（北牟婁）、伝台寺（志摩）、弥市柿（阿山）、中平（度会）、大平（度会）、御寺（名賀）、オテラ（員弁）、小平（度会）、八方（南牟婁）、いらがき（一志）の記載がある。また、甘柿の部の所属未定のものに蓮台寺（北牟婁）も見える。このように蓮台寺と言われるカキは当時三重県内のいたるところにあったようであり、中でも志摩から南牟婁の太平洋沿岸に多かったようである。

1930年（昭和5年）に伊勢市勢田町内に指導園が開設されたとき、山田が志摩地方から蓮台寺を導入したのはこのような経緯があったからであると思われる。

1979年の種苗特性分類調査報告によると蓮台寺は側溝がなく、頂端は平らで、2重柿性はないとなっている。この調査では主として農林水産省果樹試験場安芸津支場と京都大学農学部農場にある蓮台寺を調査しておこなったものであろうと思われるが、これは今回の筆者の研究と大きく異なる点である。

以上、今回の調査結果から、文献上の蓮台寺と現実の蓮台寺がかなり異なるものであることが明らかになった。表8に各果型の特徴を掲げる。

今後は蓮台寺にみられる果型の変異について、遺伝的なものであるのか、樹勢や着果位置によるものであるのかを明らかにする必要があると考えられる。

今回の調査結果からは開花時の花弁数やヘタ片数から収穫時の側溝、斜線溝の程度を判定するのはやや困難だと思われた。

ところで、官能検査の結果から、蓮台寺を知らない消費者からはヘソ型や菊型のように果型の乱れたものは高い評価が得られていないが、伊勢地方だけに産するという地域特産の果樹としては、ヘソ型のように特徴があり珍しい果実の生産も考えてもよいのではないかと思える。

5. 摘 要

伊勢市の天然記念物である蓮台寺カキを調査したところ以下のことが明らかとなった。

- 1) 蓮台寺に見られる果型の変異を在来系、大平系小判型、同菊型、同ヘソ型に分類して調査した。
- 2) 在来系は果実が小さく、種子多く、やや腰高であ

り斜線溝、側溝が少なく、2重柿性はわずかである。

3) 大平系小判型は、果実横断面が長形で果実の大きさは中くらいで、やや腰高であり斜線溝、側溝も中くらいであり、2重柿性はわずかである。

4) 大平系菊型は、果実大きく扁平であり、斜線溝多く2重柿性も有する。

5) 大平系ヘソ型は果実大きく側溝多く、顕著な2重柿性を有する。

6) 4つの果型は1樹内にみられることがある。

7) 蓮台寺のヘタ片数は5枚以上のものが比較的多く、花弁数も5枚以上が普通であり、子室数も10以上のものが多い。

8) 伊勢市ではヘソ型のように果型の乱れたものでも評価は高いが、蓮台寺カキを知らない消費者には小判型の評価が高い。

6. 引用文献

- 1) 伊勢市教育委員会（1981）：伊勢市の文化財。P. 212-213
- 2) 菊池秋雄（1948）：果樹園芸学（上巻）。養賢堂
- 3) 河野ら（1980）：西条柿の系統選抜に関する研究（第1報）島根県産西条柿の果実型について。島根農試研報 16: 56-68
- 4) 中村三夫（1983）：柿（在来品種）の生産と流通の動向。東海農政局企画調整室。P. 15-26
- 5) 農商務省農事試験場（1912）：柿の品種に関する調査。農事試特別報告 28; 1-46
- 6) 広島県果樹試験場（1979）：種苗特性分類調査報告書（カキ）。広島県
- 7) 三重県農事試験場（1914）：大正2年度業務報告。87-97

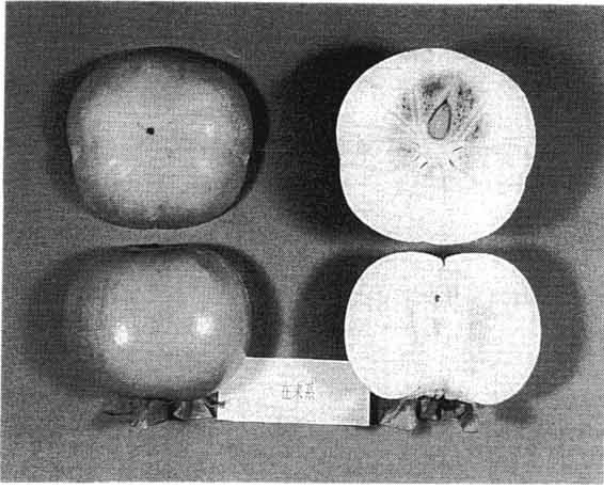


写真1 蓮台寺在来系の果実

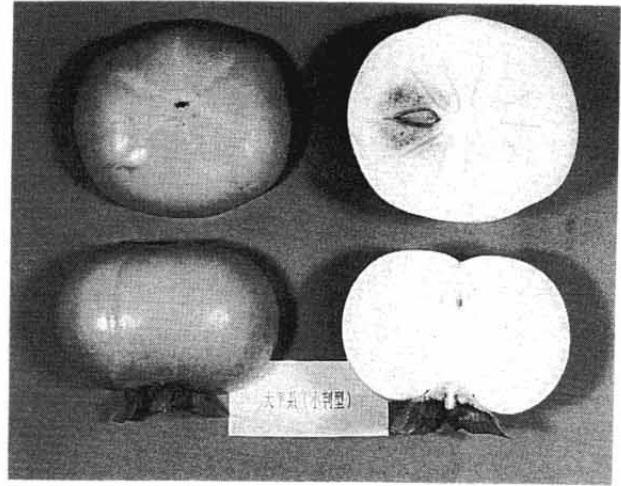


写真2 蓮台寺大平系小判型の果実

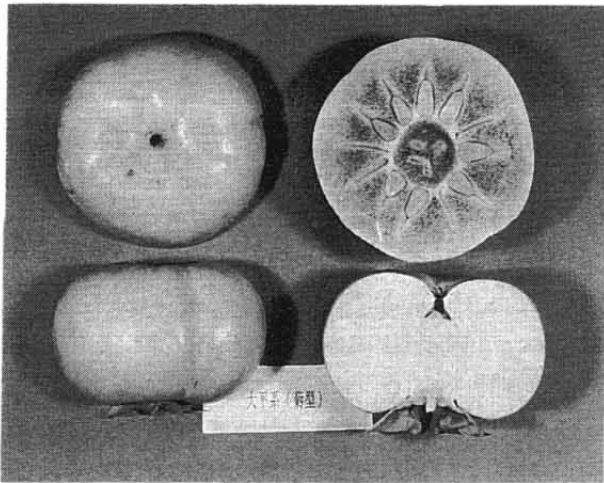


写真3 蓮台寺大平系菊型の果実

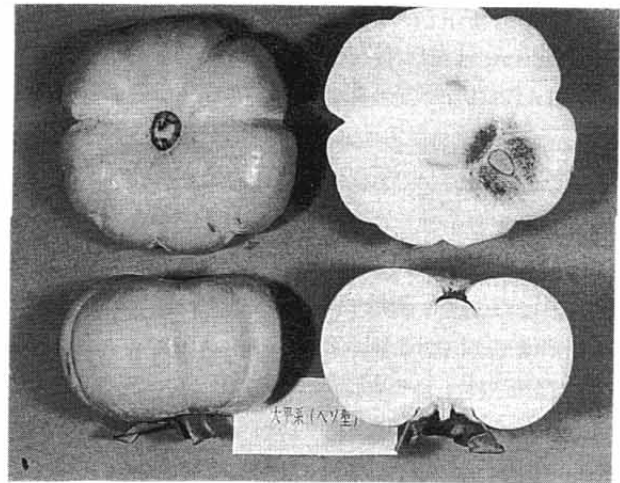


写真4 蓮台寺大平系ハソ型の果実

Types of Fruit Shape of the Japanese Persimmon 'RENDAIJI'

Yoshio HATTORI

SUMMARY

'Rendaiji', a natural treasure of Ise city, is a pollination variant, non-astringent Japanese persimmon. Characteristics of this cultivar are summarized as follows:

1. 'Rendaiji' can be divided into 4 groups by fruit type. The groups are 'Zairaikei', 'Ohirakei-kobangata', 'Ohirakei-kikugata' and 'Ohirakei-hesogata'.
2. The fruit of 'Zairaikei' is small and roundish oblate spheroid. It has few side grooves, few diagonal grooves and few seeds. There is few double fruit.
3. The fruit of 'Ohirakei-kobangata' is moderately large, roundish oblate and cylindric at its crossing face. It has a few side grooves and diagonal grooves. There are few double fruit.
4. The fruit of 'Ohirakei-kikugata' is large and compressed. It has many diagonal grooves. There are many double fruits.
5. The fruit of 'Ohirakei-hesogata' is large and it has many side grooves. It is always double.
6. Four fruit types can be found in one 'Rendaiji' tree.
7. The number of sepals is usually more than 5. The number of seed rooms is usually more than 10.
8. At Ise city, a disorderly fruit such as 'Ohirakei-hesogata' is highly valued, but consumers who do not know 'Rendaiji' highly value the 'Ohirakei-kobangata'.